

「駐在さん」警察官の聞く力 街を見守り 33 年、迎える定年その境地

毎日新聞 2023/1/26 10:14（最終更新 1/26 12:41）より転載



地域の

合同パトロール前に防犯の講話を行う後藤昭寿巡查部長＝神奈川県横須賀市湘南鷹取で
2022 年 12 月 15 日、鈴木悟撮影

神奈川県警田浦署の後藤昭寿巡查部長（59）は、横須賀市北部にある湘南鷹取駐在所員として 33 年間、街を見守り続けてきた。間もなく還暦を迎え、3 月末には定年を迎える。県警の警察官として現役最長となる「駐在さん」がたどり着いた境地とは。【鈴木悟】

後藤さんがこの街に来たのは平成が始まった 1989 年の秋だった。川崎市の高津署に所属していた 27 歳の頃、肝臓障害で深夜の当直勤務が厳しくなり、駐在所への異動を自ら希望した。複数人がローテーションで勤務する交番と異なり、駐在所は家族と生活できる住居も併設され、さまざまな業務に 1 人で当たる。妻と幼い長男を連れ、駐在所での暮らしが始まった。

後藤さんは「気がつけば 30 年以上。ずっと同じ場所にいると、この街の風景や人々がほとんど分かるようになりました。来た当時、中学生だった子どもが親になり、その子どもが小学校に通い……」と振り返る。近所の人から親しみを込めて「後藤さん」と呼ばれ、後藤さんにしか話をしない独居の高齢者もいるという。

長い駐在所生活の中で、印象的な事件にも立ち会った。今から 7 年前の春に起きた 50 代

海上自衛隊員による女子高校生への脅迫事件だ。

小学生の頃から知っている高校3年生の女子生徒が突然、駐在所を訪問し、「助けて」と泣き始めた。中年男性から「万引きしただろ」と因縁をつけられ、脅されていた。後藤さんは「進学も決まっていたので親にも先生にも言えなかった。勇気を出して来てくれたことで、その後の捜査で犯人を捕まえることができたし、被害者支援もできました」と話す。同じ場所にいるからこそ誰にも頼れない時に求められる存在となれる。そう実感した瞬間だった。

赴任した平成初期にはマイホームを持った家族で街は活気にあふれた。だが、バブルがはじけ、世が不況に突入すると、夜逃げや自殺者が相次ぎ、泥棒被害も急増した。2003年春には自治会役員らに声を掛けて、防犯対策グループを立ち上げた。以来、メンバーとともに連日、小学校の登下校時の見守りや校内巡回を続ける。

令和に突入した現在、地区に住む約半数が60歳以上の高齢者となった。最近の仕事の大半は特殊詐欺への対応で、月1回実施する自治会や学校職員との合同パトロールや防犯懇話会の際には、高齢者に必ず特殊詐欺への対策を呼びかけている。

3月末には定年という一区切りを迎えるが、今後も再任用制度を利用し、もうしばらく同じ場所で「駐在さん」を続ける。後藤さんは「人って誰かに話すことで少し溜飲（りゅういん）が下がると思う。一期一会を大切に、これからも街の中の聞く存在になれば」と穏やかに語った。